

21世紀のシルクロードはいまどこに

はじめに

奈良に日本の政治の中心があった時代、日本は大きく成長しました。その原動力は、国際交流でした。当時、中国に大きな帝国、隋・唐が出現していましたが、西方の中央アジアの国々とも交流し、異質の文化を吸収した当時のグローバルセンターでした。そのような隋・唐との交流を通じて、高度な中国の文明とともに中央アジアの異質な文明も大和の政権は移入することができました。中国と中央アジアの文明との交流は、シルクロードで結ばれていましたが、その糸が奈良まで伸びていた時代だったのです。EURO-NARASIAの言葉がぴったりとあてはまる状況でした。

本稿では、当時のシルクロードを通じた異国と奈良の結びつきの跡を振り返り、これからの東アジアの発展の



荒井正吾 (あらい・しょうご)

1945(昭和20)年奈良県生まれ。68年東京大学法学部卒業、運輸省入省。OECD日本政府代表部参事官などを歴任。米国シラキュース大学マックスウェル行政大学院で行政学修士取得。99年海上保安庁長官、2001年参議院議員となり外務大臣政務官・参議院文教科学委員長、07年から奈良県知事(現在4期目)

Shogo Arai

荒井正吾

ための奈良の貢献を通じた21世紀のシルクロードの姿、その可能性を追ってみたいと思います。

1. シルクロードと奈良の結びつき

奈良に政治の中心があった時代（6～8世紀）、中国に到来し、中国的な華夷秩序の価値観でアレンジされた中央アジア、インドの文化文明が一举に日本に流れ込んできました。隋・唐は文化の伝導におけるコンデンサーの役割を果たしていたのです。韓半島の人々も、中国大陸の政治文化の事情をこの島国の人々に伝え、また、中国で発達し、あるいは到来した文明を日本へ伝える役割を果たしてくれました。

当時、島国日本の奥まった盆地に住んでいた大和の人々は、文化文明の中国コンデンサーに接触・接続して受電する能力が高かったと言えるでしょう。

当時の国際交流で伝わった文化のうち、その後の日本に大きな影響を与えた最大のもの、仏教の伝来だっただけと思われず、

コンデンサー・中国において漢文に訳されたインド発生の仏教は、経典を通じて日本に到来しました。インド、中央アジア、中国、韓半島を通じて日本へ到来した仏教は「大乘仏教」と言われます。このくにのひとびとは長

らく、大乘仏教の他に小乗仏教があることに気づきませんでした。また、伝わった仏教の内容は主に漢文を通して理解するしかありませんでした。経典の元の言葉であるサンスクリット語やパーリ語を仏典の元の言葉として本格的に学び始めたのは第2次世界大戦後、それもドイツあたりでサンスクリット語による仏典研究が盛んになってからではなかったでしょうか。漢文に訳された仏典の中には音写された部分が少なからずあります。元の言葉が分らなければその意味も分らない部分です。漢文仏典は、キリスト教の聖書がマルチン・ルターによってドイツ語に訳されたのとは違って、日本語に正式に訳されないまま、今日に至っています。仏典の漢文を日本語の発音で声を挙げて読むので、耳で聴いているだけでは、その意味内容についてはチンプンカンプンのままです。

一方、仏像については多くの美しい仏像がこのくにに到来しました。ありがたいことです。ブツダが説法を始めたころの仏教にはもともと像がありませんでした。仏像が作られたのは、通説によれば1世紀ごろのインド北部のマトゥラーあるいは中央アジアのガンダーラやバミヤンだとされています。奈良時代に日本に伝わった仏像には、ギリシャ彫刻の香りを感じます。そのような感じを持ったのは、3年間のパリでの駐在を終えた直後、奈良で子供の頃から見なれていた仏像の前に改めて立つた時です。ヨーロッパで多くのギリシャ彫刻を見てきて、

同様の雰囲気を感じたのだと思います。特に、中世のキリストのお顔の表情と、奈良の仏像のお顔に似たところがあるように感じました。

ガンダーラでの仏像製作が起つたのは、その北西の地、今のウズベキスタンあたりにあったバクトリアという国（グレコ・バクトリア王国）が勢力を持つて南下し、ガンダーラで仏教思想と出会つたためだと言われています。インドで仏教興隆に尽力したクシヤナ朝のカニシカ王の勢力が、当時ガンダーラまで及んでいたのです。バクトリアが、東方遠征したアレキサンダー大王が中央アジアに置いてけぼりにしたギリシヤ人の国であつたことが仏像製作が行われるきっかけになつたと思われれます。バクトリアには石工技術者が多くいて、ガンダーラ地方は加工し易い石が沢山あつたとも言われています。

インドの仏教思想が日本に伝わる際も幸運に恵まれました。大化の改新、乙巳の変がこのくにであつた645年に、玄奘三蔵が出国から足かけ17年にわたるインドへの旅を終えて唐の首都長安に膨大な仏典を持ち帰つた時、奈良の飛鳥から長安に留学していた日本人僧道照（道昭）が居合わせました。玄奘三蔵とも面談の機会があつたと言われる道照はその後日本に帰り、奈良飛鳥に住んで仏教普及に努めました。



無著菩薩（アサンガ）
北円堂）写真提供：飛鳥園

玄奘三蔵が苦勞をしてインドから持ち帰つた当時インドで流行つていた仏教思想は「唯識」と言われるもので、インドのアサンガとヴァスバンドゥの兄弟が辿り着いた教えです。日本に伝わつた仏教思想は法相宗と呼ばれ、奈良の興福寺、薬師寺がその宗派の中心となっています。アサンガとヴァスバンドゥの兄弟は日本では無著と世親と呼ばれ、そのお姿は鎌倉時代に木像に刻まれ、国宝となつて今興福寺北円堂に置かれ、年に2回春と秋に公開されています。

唯識の思想は合理的です。人間の知覚には自分で分るものと、分らないものがあると言います。分るものは、眼耳鼻舌身意で表される身体を通じた意識ですが、この6識に加えて、意識下の意識が二つあり、その最も根底

に、阿羅耶識という人間の意志ではコントロールできない意識があるとされます。後世の心理学者フロイトが説いたリビドーの理論に似ているようにも思えます。人間の行動をコントロールする意識には、良い種子と悪い種子があつて、良い種子を活性化させ、悪い種子を眠らせる（睡眠させる）のが仏教の修行だと言います。悪い種子もその人の本性の切り離すことのできない部分であるので、眠らせれば良いのだと言われているのです。

法相宗を含め大乘仏教のお経で最も知られたお経は般若心経です。日本人が最も親しんでいる短いお経です。奈良県が毎年受け入れている鑑真の故郷の寺・大明寺のお坊さんに般若心経の意味を教えてもらったことがあります。看破、放下、解脫、自在の意味なのだそうです。事の本質を看破り、物事から気を離すと、執着心を捨てることができ、自由自在の心境になることを目指す教えだと言うことです。物事に執着する心から解放され自在の心を求めることを教えるお経を写経する一方、願いをかなえてほしいと祈願するのは、どういふことなのでしょう。



世親菩薩(ワスバンドウ)
国宝 木造無著・世親菩薩立像(興福寺)

2. 大仏開眼法要はインド人の僧が行う

751年に大仏殿が完成すると、翌年聖武天皇は東大寺で大仏開眼の儀式を行われました。その時の導師はインド人の僧・菩提僊那(ぼだいせんな/ボーディセーナ)でした。インドのどの地方の人で、どのような経緯で奈良に辿り着かれたのでしょうか。大仏開眼法要に伴う演舞で使用された伎楽面は、ソグド人のわし鼻やソグド人の帽子と類似しています。ソグド人は中央アジアの今のウズベキスタンあたりに多く居住し、交流交易を主たるなりわいとすする民です。韓半島慶州までの来訪は確認されていますが、島国日本への来訪の具体的物証はないとされています。しかし、奈良県明日香村の高松塚古墳壁画の飛鳥美人のスカートは、西安やウズベキスタンにあ

るソグド人の古墳に描かれたソグド人のスカートの絵と模様やスタイルが類似しています。どうしてソグド人の「面」が正倉院に保存され、そのスカートの「絵」が奈良の古墳に残されているのでしょうか。不思議です。

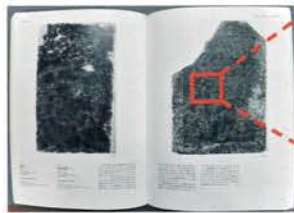
752年の大仏開眼の1年後、中国揚州大明寺の鑑真和尚は6回目の渡航の末日本へ到着されました。失明をされていたが、翌754年に聖武天皇に仏教の授戒をされています。授戒があつて正式の仏教徒になれ、そのような儀式を行なっていない私度僧と区別されます。時の天皇が仏教徒になつたのです。

鑑真和尚はインド人の大僧正菩提僊那とソリがあわなかつたわけではないでしょうが、奈良では大僧正になりませんでした。奈良市の西方に唐招提寺を建立されそこで一生を終えられました。763年6月6日(旧暦)のことです。唐招提寺では、和上の6回にわたる渡航経験、6月6日のご命日などから6という数字を大事にされています。(管長のお話)

鑑真和尚は渡来にあつて薬などの貴重品のほか、授戒に必要な多くの正式僧を連れてこられました。その中で、4代目(2代目の説もある)の唐招提寺のトップ(小僧都)になられた方は安如宝(あん・によほう)と呼ばれる胡国人で、青い眼をした人でウズベキスタン・ブハラ出身のソグド人だったとも言われています。



『中国☆美の十字路口展』
2005-2006年(大広社)



『同』見開きp153 商談図(石)拓本



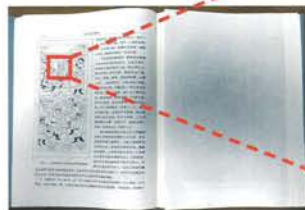
同左 ソグド人商人 部分拡大



正倉院宝物
伎楽面木彫25号醉胡徒
南倉1



『西安北周安伽墓』陝西省考古研究所編著
(文物出版社 2003年)
(提供: 榎原考古学研究所)



『同』p34 安伽墓石屏画(描き起こし)



同左 ソグド人の首領 部分拡大



正倉院宝物
伎楽面木彫53号醉胡王
南倉1

3. 『日本書紀』にペルシャ人の来訪の記載

『日本書紀』巻26、斉明天皇6年7月(の条に)660年にペルシャ人が来訪したことが記載されています。「又觀貨羅 乾豆波斯達阿欲歸本土求請送使日、願後朝於大國、所以留妻為表。」訳としては「また、トカラ人ケンズハシダチアは本国に帰ろうと思ひ、送使を要請して『後にまた大國(やまと)にお仕えいたします。よつて妻を留めてその証とします。』となりませす。」

古代イラン研究者の伊藤義教さんは、「觀貨羅人(とからひと)」は中央アジアにあつたトカレストランのこと、「乾豆(けんず)」は、トカレストランの南部の都市で、今はアフガニスタンにあるクンドウーズ、「波斯(はし)」は、英語でも Parsi (パルシ) と呼ばれるペルシャ人、「達阿(だる)」はササン朝ペルシャの王族ダーライ(Darai)の血を引くと名乗る人名、という説を主唱されています。私はこの説を信じています。

先に述べたように奈良県明日香村で発見された高松塚古墳の壁画飛鳥美人と呼ばれる絵のスカートはソグドを描いた絵のスカートと類似しています。これは、奈良県立橿原考古学研究所所長だった菅谷文則さんが、中国西安(長安)にあるソグド人を描いた古墓の壁画、ウズベキスタンにあるソグド人の古墳の壁画と比較されて主張されてきたことです。ソグド人は中国、韓国などでは、

薩保と呼ばれる集落に住んでいたのでお墓も見つかり易いのですが、明日香村のお墓は誰の墓なのかいまだに分つていません。若くして亡くなられた文武天皇のお墓と言われた時期もありましたが、今は否定されています。緑の彩色が古墳の内にあります。緑は皇太子未満の人の色なのだそうです。高松塚古墳が発見された当時の皇后陛下、今の美智子上皇后様が高松塚についての和歌を詠まれています。

いかならむ 皇子や眠りいやしけむ闇に
星宿の図ある石槨

天皇ではなく「皇子」と詠まれています。何と奥深いご洞察でしょうか。

高松塚の飛鳥美人が手に持つ扇は中国の王家のもの、枝はインドの仏具、上着は和服です。当時のファッションからして、このくにはハイブリッドの混ぜこぜだったのです。

ところで、明日香は飛鳥とも書きます。どうしてでしょうか。韓国の初代文化庁長官の李御寧(イ・オリョン)さん(現在奈良県立大学名誉学長)は、ハングルのナルダ(나루다)を充てると分るとおっしゃっています。ナルダには、明日という意味と飛ぶという意味の両方がある

るようです。香は韓半島の行政区画郡（コルル）の当て字とされています。そうだとすると、アスカという呼び名の音はどこからきたのかという疑問は残ります。今の中央アジア・ウズベキスタンの南方にフェルガナ渓谷（ムガル帝国のムガールの出身地）という谷間に「アスカ」という町がありますが、そこに最近韓国の現代自動車工場を移った時に、明日香の風景とあまり似ているので、アスカの由来はそこから来たという説が広がりました。フェルガナ渓谷はまだ行ったことがないのでよくわかりませんが、一度この眼で確かめて見たいものだと思います。

ちなみにウズベク語の「アスカ」は、「坂」という意味だと聞いたことがあります。

4. 国際交流によって日本の文化は高度化した。

〈律令国家の創成〉

6～8世紀のわが国は、韓国や中国との交流により先進的な制度・技術を受容することができましたが、豪族支配から天皇支配へと国家の形態が変容し、中央集権国家が創成されるにあたって、わが国初めての都城が建設されました。藤原京です。当時の中国とお付き合いをするにあたって、わが国で中国の都を模して作られた代表的都城は、藤原京、平城京、平安京です。大極殿について平安京での具体的な場所は分からないままですが、前



高松塚東壁女子群像



高松塚西壁女子群像

写真提供：明日香村教育委員会

2者の場所は分かっています。藤原京も平城京も道教に基づく天命思想を其本にしていました。それは政権の正統性についてです。政権の正統性は天命によるものとされ、天命は北極星から授けられるものとされました。従って、天命を授かったこの世を支配する者は一人しかおらず、天子と呼ばれ、天子のおわしますところは、天である北極星（太極）の命を受けた大極殿とされたのです。北極星の命を受けた天子は常に南を向いて為政を行うものとされました（「天子南面す」）。南面する天子の住まう大極殿は都城の最も北側に造られました。藤原京では京を囲む大和三山の垂心にあたる場所に造られ、京の中心部に位置していました。

都城の建設にあたって受容れなかった考えもありました。それは左祖右社理論と呼ばれるものです。北に位置する大極殿から見て左手の偶、南東の偶に祖先を祭るものを置き、右手の偶、南西の偶に社しゃ祿らく即ち五穀の神を置く理論は採用しなかったのです。わが国の都城建設では、ついに左祖右社理論は姿を見せなかつたと言われています。その代わりかどうかは分かりませんが、藤原京大極殿の真東の伊勢の地に、伊勢神宮の外宮豊受大神宮が造られました。どちらも持統天皇が693年の同じ年に建設されています。左祖右社理論を左右逆にして大きく転開したのもとも言われています。持統天皇はその晩年同じ年の1月に藤原京、3月に伊勢に御行幸されています。

るのは、道教が好きだった天武天皇が亡くなられた後に、何か心に秘すところがおありになったのかもしれない。

（わが国は交流交易によって、国の基盤をつくった）

奈良（大和）に中央政権が形づけられた6〜8世紀、中国大陆では分裂傾向にあった国が統合され隋、唐という統一国家が形成されつつありました。当時、倭と呼ばれていたこのくには、600年から614年にかけて4回の遣隋使を、630年から894年の最後の派遣まで16回の遣唐使を派遣しています（諸説あり）。それぞれの派遣にあたっては、こちらの事情、向こうの事情に左右されたり、その目的も文化、制度、仏教の受容れなど様々でした。今、奈良県の平城宮跡朱雀門の南に実物大と言われる遣唐使船を設置していますが、とても小さいもので、航海の不安が先に立つような「か弱い」姿に映ります。

遣唐使の派遣にあたっては、派遣の前年の秋に、藤原家の神山と言われる御蓋山の麓で祈禱を受け、翌年の夏前に平城宮で勅令を賜り、秋に難波津を出航して、長安での新年の儀に間に合わせるのが常だったと言われます。717年に入唐して帰国が叶わなかった阿倍仲麻呂が「天の原振りさけ見れば春日なる御蓋の山に出でし月かも」と詠ったのも、彼が祈禱を受けた時には御蓋山に満月が輝いていたのではと想像されます。

遣隋使、遣唐使の派遣の内容は日本側の記述と中国側の記述がくい違っていることがあります。大津透さんや河上麻由子さんは、中国の文献と日本の文献の比較をされていますが、記述のくい違いのひとつとして、第1回遣隋使は日本書紀には記述がないのに隋書には記述があるといった例を挙げられています。隋書にはでっち上げを書く動機がないので、こちらの事情で日本書紀に記述されなかったでしょう。第1回遣隋使はこちら側ではうまくいかなかった派遣と考えていたのではないかと言われています。

〈漢字の受容〉

当時の日本には言葉はあったものの、文字はありませんでした。中国や韓半島との国際交流と国家の組織運営の必要性が生じたことから、中国の文字、漢字を採用したものと思われれます。当時の大和言葉を文字化するにあたっては、音をそのまま残して傍の部分とし、大和言葉にはない新しい言葉には、漢字の訓の部分を活用したものと見られています。漢文の発声に用いる抑揚の四声は受け入れる必要がありませんでした。仏教経典は漢文がそのまま伝わり、漢字を日本風の音読みをしているので、世界中誰が聞いても意味が分からない音となっています。

『日本書紀』の漢字の音韻を研究されているのが京都産業大学の森博達先生です。『日本書紀』は国際的にも

通用すべき文書として漢字で書かれています。その漢字に誤用・奇用の多く見られる巻とそうでない巻を発見され、誤用・奇用の多いのは日本人が書いたもの、正確なものは唐人が書いたものとされています。誤用の例としては「憂国之不治」（このくにの治らないのを憂う）を挙げられています。憂・愁はどちらもうれう・悲（かな）しむの意味だが「憂」は自動詞、「愁」は他動詞として使われます。この文章の例では「憂」の漢字の使用は誤りで、「愁」とすべきなのです。また「在」と「有」はどちらも「ある」という意味がありますが「在」は具体的な場所に存在する意味、「有」は単に有るかないかの場合の有るの意味、これを区別しないで誤って使っている例があると指摘されています。『日本書紀』に初めて現れる、聖徳太子が作られたとされる17条の憲法も誤用・奇用の多い漢文とされています。『古事記』は漢字の音の部分と和語の発音に使っているだけなので、中国の人にはまったく読めないものですし、万葉集は同じく歌を万葉仮名と呼ばれる漢字で表したただけなので、漢文の音利用なのです。



第4回 大賞受賞
福田 康夫氏
(元日本国内閣総理大臣)



第1回 大賞受賞
スバチャイ・パニチャパック氏
(国連貿易開発会議(UNCTAD)
事務局長)

奈良平城京—ER—Aアジアコスモポリタン賞
受賞者(一部抜粋)

〈日本国号が成立〉

702年に遣唐使として派遣された粟田真人（あわたのまひと）は、時の中国の皇帝則天武后に謁見した際に、「倭」という国号に代えて「日本国」という国号を使つてほしいと申し出て認められました。「倭」というのは蔑称とされていたので外交的には大成功です。ところが、日本国という国号は百済を指すのに使われたとも、単に東方の国という意味とも言われることがあります。なお、粟田真人は、当時中国の皇帝が女帝になっていたことを知らずに訪問して大変驚いたそうです。

また、日本国は中国のある地方の発音で「ジーベングオ」と読まれ、後にその音をマルコ・ポーロが「ジパング」と『東方見聞録』で記し、今の英語などの発音「ジャパン」の呼称に繋がったという説もあるようです（諸説あり）。

5. これからの東アジアの発展のために

ここまで、日本はシルクロードを通じた交流交易により高度の文明を受け入れることができ、国の発展に繋げることができたことを類々と記してきました。文化文明が様々な形で発展してきた東アジアは、これから同じような方向を向いて共同の発展の歩みをとることができるようでしょうか。昔、遠くから文化文明を運んだシルクロード

は、21世紀にもどこかに存在するのでしょうか。

『アジア史概説』という本を出された宮崎市定さんは、アジア史について次のように述べられています。「アジア地域では文化の中心が分かれて数箇所が存在する。西アジアのペルシア・イスラム文明、東アジアの漢文明、その中間のインドのサンスクリット文明、東端の日本文明と、大きなものを数えただけでも四種があげられる」とし、これら4つの文明は系統の異なったものであるけれども「交通という紐帯によって緊密に結びつけられている。そして相互に啓発しあい、競争しあい、援助しあいながら発展してきた」つまりかつてはシルクロードで繋がっていた文明であり、それは「ちょうど、スギナとツクシとが地面の上ではまったく違った形を現わしながら、地下では共通の根を持っているようなものである」と述べておられます。

地下の共通の根を發展させるためには相互の啓発が、競争が、援助が必要です。奈良県のささやかな努力を述べさせていただきます。



第3回 経済・社会科学賞受賞
藤田 昌久氏
(甲南大学特別客員教授)



第2回 経済・社会科学賞受賞
ピーター・デーヴィッド・ドライステール氏
(オーストラリア国立大学名誉教授)

〈東アジア地方政府会合〉

ヨーロッパの発展の形を見てみると、多くの戦争も行われたが、今は意思疎通の大事さに気づき、努力をされていくように見えます。東アジアも常に集まり、意見交換を重ねていくのが東アジアの共生発展のために不可欠のことと思われまます。

奈良県はそのような行動に貢献するため、2010年の平城遷都1300年を記念して、東アジアの地方政府間の交流の場である「東アジア地方政府会合」を設立しました。「共通する課題」の議論を通じて、それぞれの地方政府が解決の道筋を見出すきっかけを作ろうとするものです。意見交換を重ねれば相互理解が進み、信頼の構築に繋がります。それぞれの地方政府の行政能力の向上にも資すると考えたところです。もうこれまで10回開催してきましたが、東アジアの国々の地方政府は多様でありながら、多くの共通した課題を持ち、その指向する方向も同じであることが多いことが分かっています。

重要なことは、国情に応じた課題解決のそれぞれのやり方に、工夫が要るのではないかという点です。国家間には折り合いが悪くなる場合がありますが、地方政府の間では利害関係が発生することがありません。国間の外交関係を補完して、平和で安定した東アジアを目指した活動になり得るものと思っています。現在東アジアの

7ヶ国74地方政府の参加があり、来年はインドネシア・西ジャワ州のバンドン市で開催の予定です。

〈奈良平城京―ERIIAアジアコスモポリタン賞〉

同じく平城遷都1300年を記念して創設し、インドネシア・ジャカルタに置かれている「東アジア・アセアン経済研究センター(ERIA)」と奈良県が共同して運営しているのが「奈良平城京―ERIIAアジアコスモポリタン賞(旧名称・平城遷都1300年記念アジアコスモポリタン賞)」です。

経済・社会科学、文化の面で東アジア共同体の形成に資する優れた貢献をされた個人・団体を対象に賞を贈呈してきました。これまで大賞として、スパチャイ・パニチャック氏(国連貿易開発会議(UNCTAD)事務局長、受賞当時・以下同じ)、マンモハン・シン氏(前インド共和国首相)、ティン・セイン氏(前ミャンマー連邦共和国大統領)、福田康夫氏(元日本国内閣総理大臣)の各氏に賞を贈呈させていただきました。また、経済・社会科学賞は、ベネ



第4回 メモラブル賞受賞
故スリン・ピッスワン氏
(元ASEAN事務総長)



第4回 経済・社会科学賞受賞
リチャード E. ボールドウィン氏
(ジュネーブ高等国際問題開発研究所
国際経済学教授)

ディクト・アンダーソン氏（コーネル大学政治学都名誉教授）、ワン・グンウ氏（歴史学者）、ピーター・デーヴィッド・ドライスデール氏（オーストラリア国立大学名誉教授）、藤田昌久氏（甲南大学特別客員教授）、リチャード E. ボールドウィン氏（ジュネーブ高等国際問題開発研究所国際経済学教授）の各氏に贈られ、メモラル賞を故スリン・ピッスワン氏（元 ASEAN 事務総長）らに贈呈させていただきました。これらの方々は東アジアの共通の方向を向いた発展のために努力されてこられ、その功績は誠に顕著であります。このような方々の地道な努力が東アジアの発展の礎であることを確信しています。

また、奈良県の東アジア発展への貢献としては、ささやかなものですが「東アジア・サマースクール」があります。次世代の東アジアのリーダーとして、グローバルに活躍できる人材の育成を目的に 2011 年からこれまで 9 回実施しています。奈良にさえ来てもらえれば、無料で 2 週間程度の研修勉強会の機会を提供するものです。授業は日本語で行い、最終日に日本語で意見発表してもらっています。毎回 50 人近くの中国、韓国、日本からの参加があって、皆楽しそうに勉強されており、良い思い出を作ってもらうことができましたらと考えています。

グローバル化が進む世界の中で競争を通じた切磋琢磨を介して、それぞれの国がその持ち味を活かしながら発展することができたら、これに過ぎる喜びはありません。

21 世紀のシルクロードは、大昔のように目に見える太い道ではなく、目立たないところに存在し、有益なアイデアが行き交う小さな道であるようにも思えます。そのような目立たず後方にたつ現代のシルクロードが、もっと多く育って東アジアの発展に寄与されることを切に願っています。

〈了〉